ー文化の薫る活力ある地域づくりをめざしてー　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1．財団ニュース「作州路」23 号の発行

2．普及講座の開催

「オリジナル･イースターエッグを作ろう !!!!」
講　師／吉元 咲希
期　日／令和２年２月 16 日（日）
会　場／勝央美術文学館

「オリジナル･イースターエッグを作ろう !!!!」の様子

3．事業協賛に伴うＰＲ活動
「金時祭花火大会」への協賛

芸術文化活動事業

【主催事業】
■公募展の開催
○第 16 回ミマサカコドモ絵画展
会　期／令和２年１月７日
～令和２年１月 26 日
会　場／勝央美術文学館
展示室・町民ギャラリー 1･2

「ミマサカコドモ絵画展」会場風景

■作品展の開催
○gallery exhibition vol.32
池田愛花里　やっぱ サラダボウル！
吉元咲希　作品展
会　期／令和２年２月 16 日
～令和２年３月 15 日
会　場／勝央美術文学館
町民ギャラリー１

「池田愛花里　やっぱ サラダボウル！
吉元咲希　作品展」会場風景

■講演会の開催
○五木寛之講演会 –地図のない旅–
と　き／令和元年６月１日
会　場／勝央文化ホール

■事業協力
○岡本綺堂没後 80 年 岡本経一生誕 110 年
最後の江戸っ子 岡本綺堂･経一の仕事
○株式劇団マエカブ・Unit out 合同公演
「往来～綺堂・ホームズ・恋と魔犬～」

【共催事業】
■企画展の開催
《文学》
○小企画 38
岡本綺堂没後 80 年･岡本経一生誕 110 年
「半七とホームズⅡ」〈第１期〉〈第２期〉
《美術》
○コレクション展 vol.40
郷土の画家シリーズ「野遊びの、春。」
○コレクション展 vol.41
郷土の画家シリーズ「緑陰の。」

【助成事業】
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業

【後援事業】
ヘレン･ケラー ～ひびき合うものたち
三遊亭小遊三　林家たい平　二人会
SHOO ONKATSU GALACONCERT
ピアノトリオ ミュゼ コンサート
深まる秋のコンサート！
ミュゼと一緒に～鼓動と躍動～
宝くじ文化公演 森山良子コンサートツアー
2019～2020 Prime Songs
アコースティックバージョン
勝央金時太鼓コンサート　音の響宴Ⅱ

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業への
助成事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します！

地域芸術文化振興のための助成活動を実施しております。詳しい内容は、財団事務局へお尋ねください。

当財団への皆様の貴重なご寄付をお待ちしております！

当財団への皆様のご寄付は、地域文化事業の実施に役立てられています。
ご寄付をいただいた皆様は、税額控除をうけることが出来ます。

表紙について【数々の伝説が残る那岐の山並みと前谷の弁当石】

那岐山系一帯には、土地々々に昔から伝わるさんぶたろうの伝承があります。その死に際しては、草履に仕掛けられた毒針のため悶え死に、大地は揺れ、あたりは三日三晩暗闇に閉ざされました。身は四方に飛散し、頭は奈義町関本（三穂神社）、胴体は同町西原（杉神社）に、右腕は美作市右手（右手神社、右手大明神）に、肩は鳥取県智頭町（河野神社）に飛び散ったと伝えられています。右の写真は、岡山県勝田郡勝央町下町川前谷の田畑の真ん中にある巨石です。太郎が、弁当に入った石を「ぷっ」と吹き出したと伝えられています。

編集後記

本紙にご寄稿いただいた、森 俊弘 先生のリクエストで、さんぶたろうゆかりの“冠雪した”那岐山を撮影しようと下町川地区へ何度も足を運びましたが、山から吹き下ろすの雪交じりの風にさらされ敢えなくダウン･･･。流石に太郎のため息のような、那岐下ろしにはかないませんでした。表紙は、晴れ間の見えた那岐方面を、田んぼの畔から撮影したものです。今回編集にご協力いただいた、森先生をはじめ、赤木耕三様、岡本良規様、竹内素子様、竹内守男様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。(E.N)

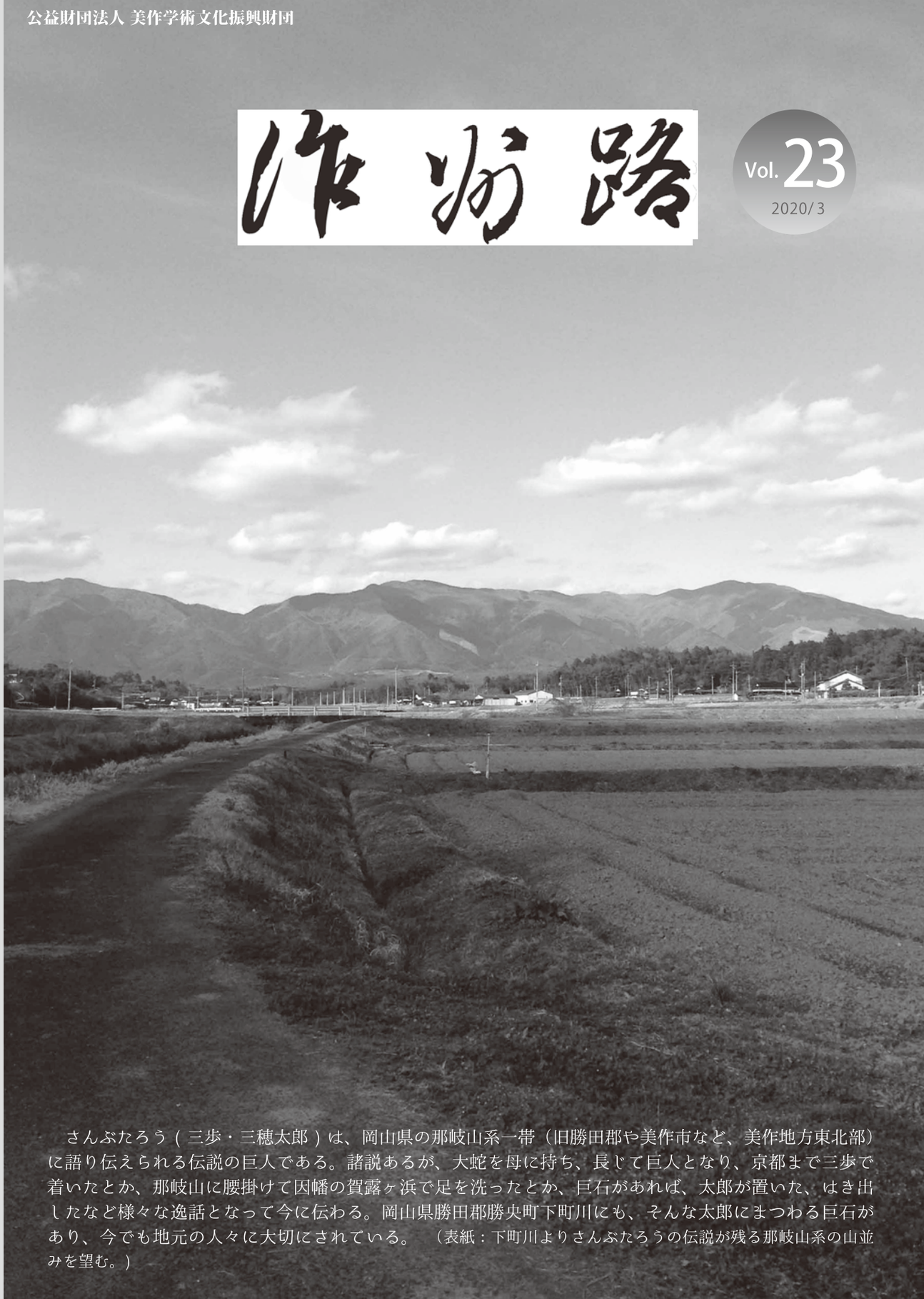
公益財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2020 年 3 月 31 日
編集・発行：公益財団法人美作学術文化振興財団
印刷：友野印刷株式会社

公益財団法人 美作学術文化振興財団

作州路

Vol. 23
2020/3



さんぶたろう（三歩・三穂太郎）は、岡山県の那岐山系一帯（旧勝田郡や美作市など、美作地方東北部）に語り伝えられる伝説の巨人である。諸説あるが、大蛇を母に持ち、長じて巨人となり、京都まで三歩で着いたとか、那岐山に腰掛けて因幡の賀露ヶ浜で足を洗ったとか、巨石があれば、太郎が置いた、はき出したなど様々な逸話となって今に伝わる。岡山県勝田郡勝央町下町川にも、そんな太郎にまつわる巨石があり、今でも地元の人々に大切にされている。　（表紙：下町川よりさんぶたろうの伝説が残る那岐山系の山並みを望む。）

「菅家一族」と「三穂太郎」の実像を探る

森　俊弘（岡山地方史研究会会員）

美作東北地域の歴史・文化を語る上で従来、強く認識されてきたキーワードに、「菅家（かんけ）一族」と「三穂太郎（さんぼたろう）」がある。前者は、前近代から現代にも繋がる地域社会の系譜的紐帯として、後者は、その系譜上での共通の始祖、あるいは民話の形で地域の文化的基層として機能してきた経緯がある。

このような事象について、歴史学の立場で考えたとき、そろそろ再考が必要ではないかと考えた。以下はその実践の概要であるが、方法としては、文献による検討や現地の踏査によることになる。

「菅家一族」と「三穂太郎」の実像をめぐって

地域史の叙述などで多く参照され、最も知られている「菅家一族」の関連系図に、「有元家系図」（「東作誌」所収。以下、「系図」）がある。同家が「菅家一族」で中心的な位置にあるとされることによるが、系図の構成に注目すると、他の史資料との比較から、大きく三つに分割できる（図１）。

①菅原氏関連記事……中央の公家・菅原氏の系譜と同一の歴代。

②「太平記」関連記事……軍記物語「太平記」に描かれる、「菅家一族」の人々。

③戦国～江戸時代の記事……戦国時代の領主から江戸時代に繋がる有元家の歴代。

まず①は、有元氏の一族が、江戸時代中期に京都へ出仕し、当時完成した「系図」の裏書きを菅原氏の末裔・高辻家に依頼するなど深く関係している。次に②は、「太平記」によらなければ地域勢力についてほとんど何も言えない状況ながら、記事に現れる有元・福元・植月・鷹取諸氏の名字の地は、現在の奈義町南部から勝央町にかけての滝川流域に収まる。江見･広戸氏は「太平記」では一族に含まれず、従来、美咲町原田付近が名字の地とされてきた原田氏も、勝央町畑屋に「原田」の小字が残る。さらに、諸氏の分布や歴史的背景に鑑みれば、先行する時期の経済基盤に、勝間田焼の生産・流通があったのではないかと考えられる。最後に③は、江戸時代前期に成立した「武家聞伝記」に記録された当主の世代数と合わず、時代が降って、「系図」作成にあたり、歴代に数代を追加した痕跡がある。

すなわち、「系図」は古くから書き継がれたものではなく、江戸時代中期に、大きく三つの史資料を組み合わせて作成されたことが分かる。③は、近い時代のことでもあり、この部分には、地域の歴史的事実を含む可能性があるが、系譜操作によってかえって現代での検討を困難としている。

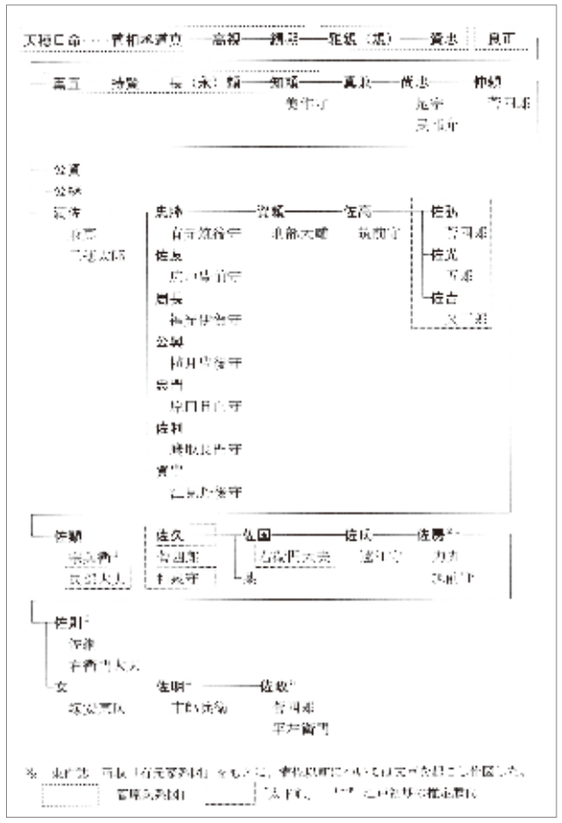


図１　「有元家系図」と「菅原氏系図」・「太平記」等の比較（奈義町教委 2019）

また、①と②の接点に位置する重要人物、菅原満佐は従来、実在の人物で「三穂太郎」のモデルとされてきた。しかし、「系図」成立の過程で、いわゆる「菅家七流」の始祖として設定された可能性が高い。口承の世界では、大らかな巨人であるにも関わらず、「京都まで仙術で飛翔し三歩」など、かえって無理に人へと押し込めるところなど、実は、「三穂太郎」こそ満佐のモデルなのではないか。

郷土の文人・皆木保実の残したもの

ところで、現在一般にイメージされる、美作東北地域の中世史像は、実は、江戸時代後期の文人・皆木保実（三郎左衛門。1767～1851）が手がけた、軍記物語「美作太平記」の流布・定着によるところが大きい。併せて、那岐山中での「三穂太郎」の誕生物語も、保実の文人的手腕の発揮により、流布・定着したものである。

同書で保実は、自家を含めた地元の有力諸家を、「菅家一族」に直接関係付けている。ところが、先の有元氏や諸家との系譜の相違が問題となったらしい。結果、関係者との調査（調整）によって「菅家氏分録」（未見、抄録のみ現存）が編纂・配布されている。同書では、従来一定しなかった、いわゆる「菅家七流」が確定し、より多くの諸家百数十家が「菅家一族」へと組み込まれるに至る。すなわち、江戸時代後期の地域秩序を、逆に過去に遡及・投影し、系譜や歴史事実が組み立てられたということである。

保実は、地域の歴史研究・文芸に大きな足跡を残しており、三穂太郎屋敷跡など、当時の伝承等を記した記事や、絵画資料には、その特定に当たって参考になるものも多い（図2、3）。しかし、あえてその問題点を指摘すれば、既存の史料や伝承を自身の思惑で組み合わせ、物語を綺麗に作り上げた結果、その原形が損なわれ、現代での検証を困難としている事実がある。これは、保実に限らず、つとめて現代的な問題でもある。

図２　三穂太郎屋敷跡の遠望

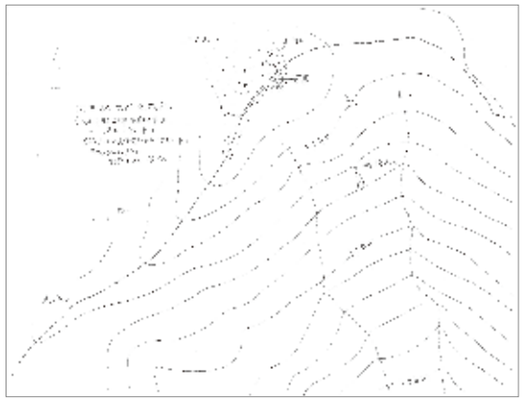


図３　三穂太郎屋敷跡縄張図

「菅家一族」と「三穂太郎」のこれから

以上のように、「菅家一族」については、従来の連綿たる貴種、勤王の武士といった呪縛から離れることで、美作東北地域の中世史が新たに開けゆく可能性を秘めている。また、「三穂太郎」についても、「菅家一族」の始祖という人的かつ等身大の位置付けから解放され、大らかかつ地域での神話的存在である巨人、「さんぼぅ太郎」への回帰が果たされることになるだろう。

※本稿は、令和元年 11 月 17 日、奈義町文化センターで開催された、『今も生きている巨人 伝説さんぶたろう』第２集出版記念講演会での講演内容をもとにしている。なお詳細は、奈義町教育委員会刊行の同書を参照いただきたい。